

2 4. Shaharah のアーチ橋

(1) はじめに

ここに取り上げたシャハラ (Shaharah) のアーチ橋は図 1 に○印で示したようにイエメン (Republic of Yemen) の北部にある。ここは最近イエメン観光の目玉の一つになっているようであるが、筆者が国際協力事業団 (JICA) による地方水道計画の調査団長として当時の北イエメンに赴いた 1975 年頃は、遠隔の地であるとともに、共和国成立後間もなくで世情不安定のこともあり、当初予定していた事前調査の対象から外した経緯がある。現在もアクセスの悪さは当時とさほど変わっていないと思われる。



図 1 Shaharah の位置

このように容易に近づくことができないことから、この地はイエメンの歴史を通じて外敵の侵略に対する抵抗の拠点として重要な役割を担ってきた。今日にあっても村人達は用心深いところがあって、その抵抗の跡や歴史を詳細に知ることは難しい。

本題の前提として、このあたりのことについて理解しておくことは重要と考えるので、その歴史について触れておくことにする。

Shaharah は狭く、遠隔地にありながらおよそ 1,000 年もの永い間、ザイド派 (Zaidi group=Husayniyyas) のいわば隠れ砦として、また抵抗勢力の集結地になり得てきたのは図 2 に示したように、地

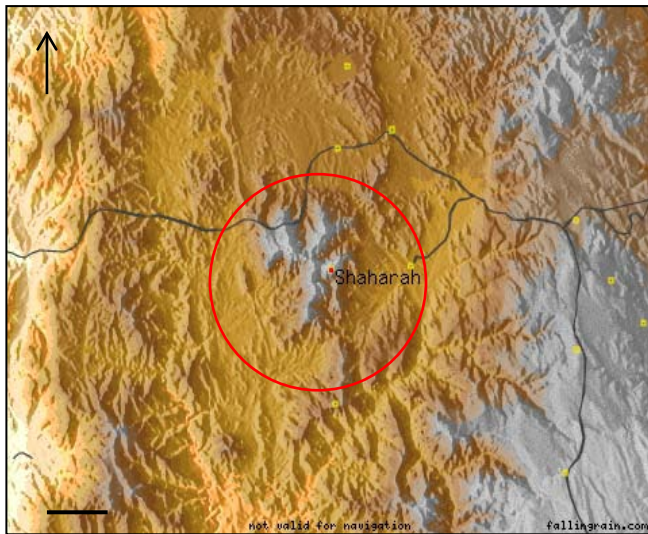


図2 要害の地 Shaharah

形の険しさ、といった天然の要害に負うところが大きい。すなわちこの場所と周辺の平地との比高は1,000m以上に達し、集落（というより要塞といった方がよい）は標高2,500mを越す山地の頂上にある。

ところでイエメンは世界の文明史にあつて最も古い国の一つにあげられており、アラビア半島の歴史はイエメンに発したとも言われている。

イエメンはおよそ紀元前2,300年から6世紀にかけて、シバ王朝 (Sabaean)、カタバニ王朝 (Qatabanian) ヒムヤル王朝 (Himyarite) をはじめ数多くの王朝が時に並存して争い、また興亡を繰り返してきた。さらにまたエチオピア、ササン朝ペルシャ、そして近代はオスマントルコやイギリスなどの外国からの支配を受けてきた。その自然の豊かさと、海上交通上の要衝といった地理的位置が魅力だったためである。

897年にザイド派 (Zaidi) の支配者だった Yahya al Hadi ila' l Haqq がイマーム (Imam: イスラムの神格化された教主) の基礎を築いたといわれており、その体制は20世紀後半まで存続した。しかし中世のイエメンは地方ごとのイマームが互いに抗争し、混沌とした時代であった。このような背景にありながら地方に割拠していたイマームは外国勢力に対する強固な抵抗勢力にもなってきた。Shaharah もその拠点の一つであったという訳である。

(2) イエメンの集落



写真1 銃を手にした部落民

つい最近まで（ところによっては現在も）イエメンは部族中心に動いてきた国柄である。たしかに山岳地帯では集落の多くは峰々の上に立地し、その間は深い谷によって隔てられている。図3は西部山岳地帯の集落分布の様子で、一つ一つの点が集落であるが、集落間のコミュニケーションはこのような環境からみてほとんどないと

言っても良い。そればかりか時には互いに争うこともある。筆者が滞在したところは写真1にあるように銃を手にした部落民をよく目にした。また写真2は筆者の現地調査時のスナップであるが、用心のため銃を手にした部落の人（両端）が同行してくれた。（後



ろの人はカウンターパートで、その他は野次馬の少年達)

下の2つの写真は典型的な山岳集落の例である。いずれも同族からなる集落であろうか。その外観はまさに要塞といったところである。

写真2 用心棒付きの現地調査



写真3 典型的な山岳集落(1)
(Mahweet)



写真4 典型的な山岳集落(2) (Mahweet)



写真5 カットパーティ
(矢印は筆者)

集落の人達は結束が固く、写真5にあるような“カットパーティ”を頻繁に開いている。カットとはお茶の葉っぱに似た一種の覚醒剤で、これを噛むと爽快な気分になり、かつ飢えも忘れる。また水煙草も吸い回しをして楽しんでいる。(しかし筆者を除いて全員現地人なのであまり良い気分ではない)

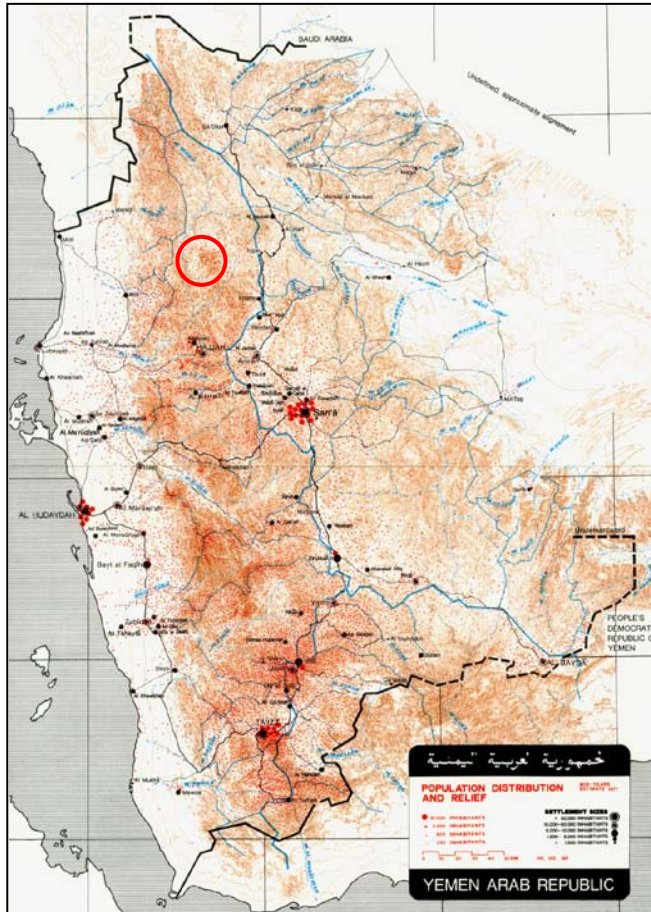


図3 イエメン西部の集落分布 (○は Shahrāh)

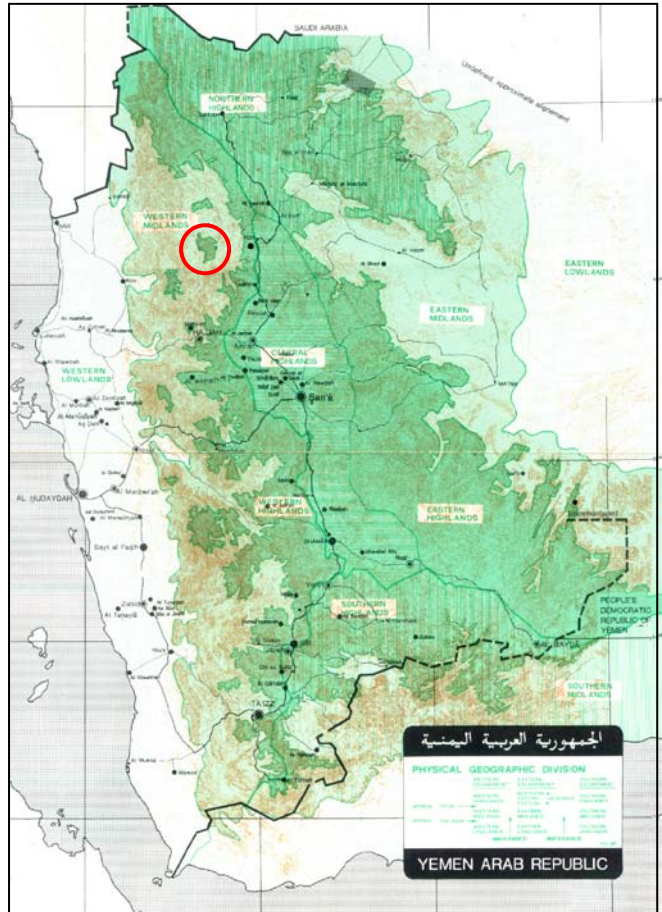


図4 イエメン西部の地形

図の説明：

この2つの図面は Central Planning Organization, Y. A. R.(1978) : Final Report on the Airphoto Interpretation of the Swiss Technical Co-operation Service から引用したものである。比較的平坦な中央脊梁山脈の高地帯に位置する首都のサナ (Sana' a)をはじめ、ダマール(Dhamar)、イブ(Ibb)、タイズ(Taizz)などの都市を除いて、集落密度の高いところは紅海に面した急峻な西部山岳地帯に偏って分布していることに注目していただきたい。紅海からの蒸発によって湿った大気が上昇して東に流れ、山地斜面にぶつかって雨や露を大地にもたらすため、農耕には好都合であるという理由もあるが、よくみると地形境界が複雑に入り組んでいるところに集落が密集している傾向が指摘され、外敵の侵入に対する防御という点も無視できない。(○印は Shahrāh)

(3) Shaharah というところ

先にも述べたように Shaharah はイエメンの北部に位置し、その先は辺境の地、Sadah を越えればサウジアラビア領である。

Shaharah の中心集落が位置する山地とその周辺の山地をあわせて Jabal Shaharah、すなわちシャハラ山地と呼んでいる。写真 6、および図 5 にあるように周辺の平地から突出して外敵の侵入を容易に許さなかった理由がよくわかる。その周辺に点在する集落の人々はいざという時に山頂に集結して立てこもったのであろうか。

1587 年にこの要塞は初めて Zaidi の支配下からオスマントルコの手落ちるが、その期間は 10 年ほどで、Imam Qasim bin Muhammad が率いる Zaidi 派がこの要塞を奪回し、1635 年にはオスマントルコの占領は終了する。19 世紀から 20 世紀にかけて 2 回目のオスマントルコによるイエメン支配の間、トルコ軍はこの地を再び取り返すことを試みたが、それは失敗に終わった。この地はイエメンの中でもオスマントルコに屈服しない数少ないところだった。

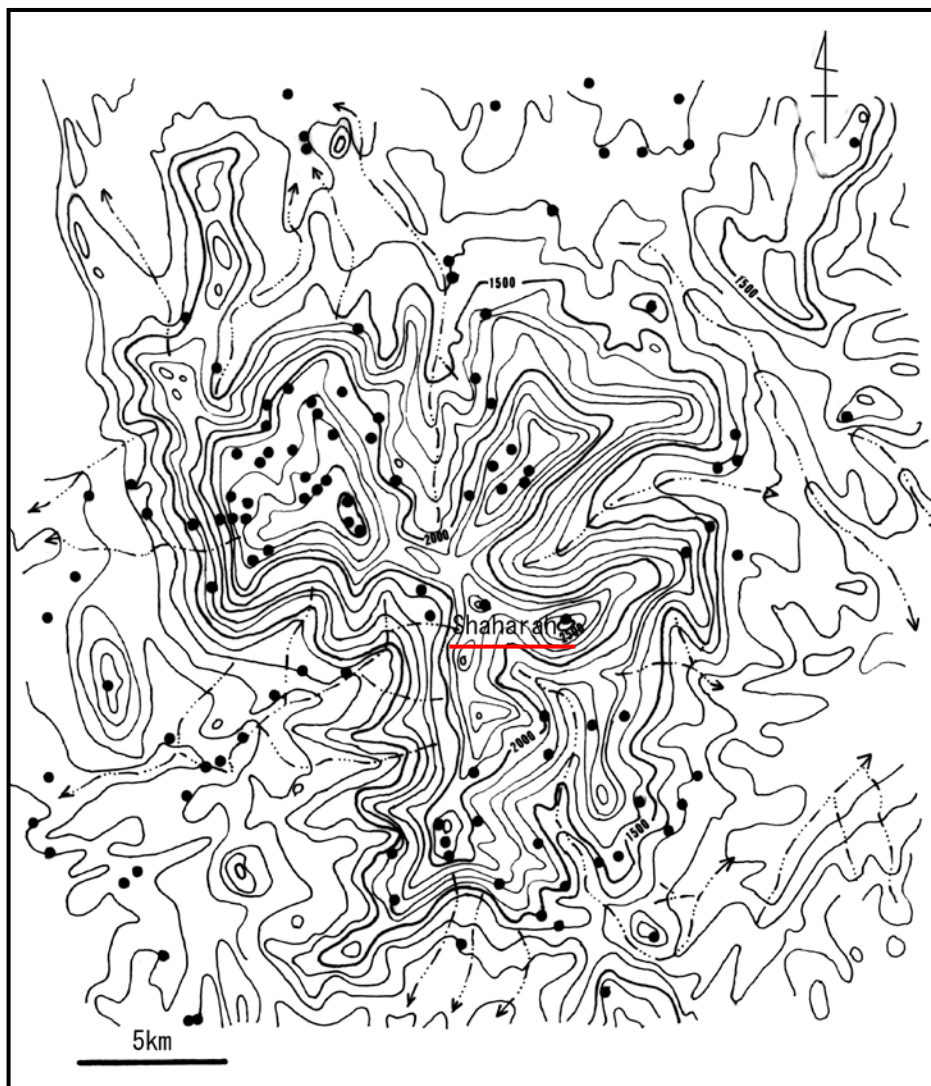


図 5 Shaharah とその周辺の地形および集落 (●印)

(調査時 (1975) の統計資料によると、この地方の人口は 16,748 人で、戸数は 2,840 となっている)



写真6 天然の要塞 Shaharah の遠望(矢印はアーチ橋のある場所)

20世紀に入ってイエメンの共和宣言に続く1960年代の内戦の間、Shaharahは再びImam派の最後の砦となる。その保守勢力は長期間抵抗し続けたが、遂にはエジプト空軍の空からの攻撃には抗し得ず、これを最後として今日に至っている。

写真7はGoogle Earthから引用したShaharah山地周辺の画像である。真ん中の太い水系がShaharah集落のある南側の稜線とShaharat al Faysh集落のある北側の稜線を分けている。なお写真6は後者の地から遠望したものである。



写真7 Shaharahとその周辺の空中写真

この画像において、Shaharah側の東西に続く稜線を直角に切る方向に何本かの明瞭な断裂が見える。特に矢印で示したものは顕著で、南北方向に長く追跡でき、また山体を深く切り裂いている。(その位置は写真7の矢印にあたる) その切り込みは300～500mに達する一方、幅は広いところでも数10mに過ぎない。

ここに本文の主題のアーチ橋がかかっている。

この付近の山体をつくる地質は風化の進んだ玄武岩質溶岩をはさむ珪長質凝灰岩からなり、Yemen Volcanicsとして一括されている。ところで建物の石材として利用されている石灰岩はこのあたりには分布せず、一番近いところでも直線距離にして10km、

標高差にして 1,000m もあるので、集落（要塞）の建設には言語を絶する大変な労力が費やされたであろう（写真 8, 9）。勿論アーチ橋も主部は石灰岩から切り出された石材を組み立てて建設されたものである。



写真 8 Shaharah の遠望



写真 9 石灰岩を加工して造られた建物



写真 10 岩盤を削り貫いて造られたシスターン

日常の生活は勿論、外敵との長期戦で絶対に欠かせないものは水である。この国の山岳集落では乾期にはどこでも遙か谷底まで水を汲みに行くのは日常のことであるが、戦闘中はそうはゆかない。頼りになるのは天水だけである。Shaharah には色々なタイプのシスターンが 23 箇所に残存しているが、写真 10 にあるのは圧巻で、谷中の岩盤を掘り下げて貯水量の増加を図っている。ここでは水位の低下に応じて下方に降りられるようになっている。

なお写真 9 の手前に見えるのは潤渴した山頂のシスターンである。

(4) Shaharah のアーチ橋

最後になってしまったがアーチ橋についてお話する。この橋は 17 世紀の初頭、オスマントルコの侵攻に備えて、すでに存在していた古い橋を基礎として造られたものであるが、通常は谷を挟んで隣り合った 2 つの山岳集落、Shaharah と、Shaharat al Faysh (前述) の往来のために使われてきた。一説によると外敵の侵入など、一旦事ある場合には数分の内に取り壊すことが出来ると言われている。

写真 11 は Google earth の 3 次元画像から切り出した Shaharah 地域の東方上空からの俯瞰である。アーチ橋が山体を刻む深い断裂を跨ぐようにして懸っているのが見える。その北側の山頂部には集落の家々が、斜面にへばりつくようにして立ち並んでいる様子もみえる。



写真 11 Shaharah 集落とアーチ橋の位置

(東方上空からの俯瞰 Google earth による)

橋の幅は 3m、長さは 32m で、さほど大きなものではないが、深さ 300m 以上にも達する峡谷を跨ぐ姿は圧巻である (写真 12, 13)。イエメンという国はこのコーナーで前に紹介したマリブのダム (紀元前に建造) の構造から見ても分かるように、また昔からの石造りの住居の造りから見ても分かるように、石工技術は非常に優れている。したがってこのようなアーチ橋を建造することは可能であったといえる (写真 14)。

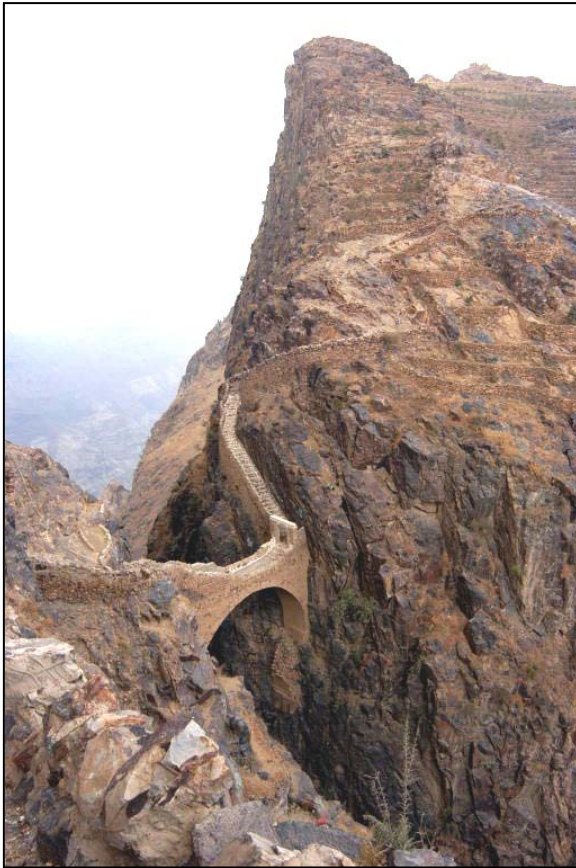


写真 12 アーチ橋の全体

一番の難関工事は橋脚の取り付け部であろう。オーバーハング状の岸壁を山体内部まで掘りこみ、これに石灰岩ブロックを埋め込みながら積み重ねて基礎としている（写真 15, 16）。

これを造り上げた技術師（Salah al Yemen）は橋が完成した後、極度の緊張が重なって疲労し、気が狂ってしまったと言われている。

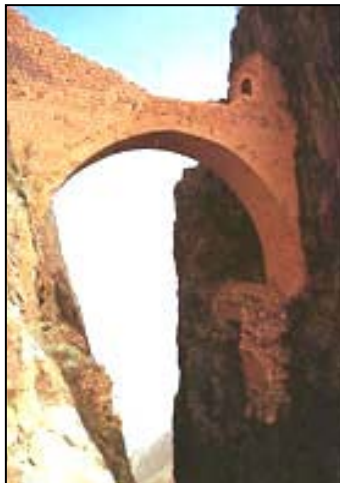


写真 13 峡谷を跨ぐアーチ橋
（右下に見えるのは古い橋の残骸）



写真 14 アーチ部分

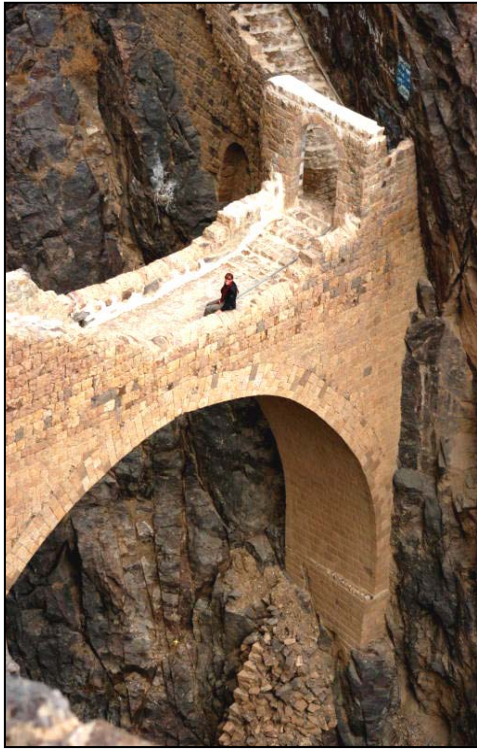


写真 15 橋脚の取り付け部①

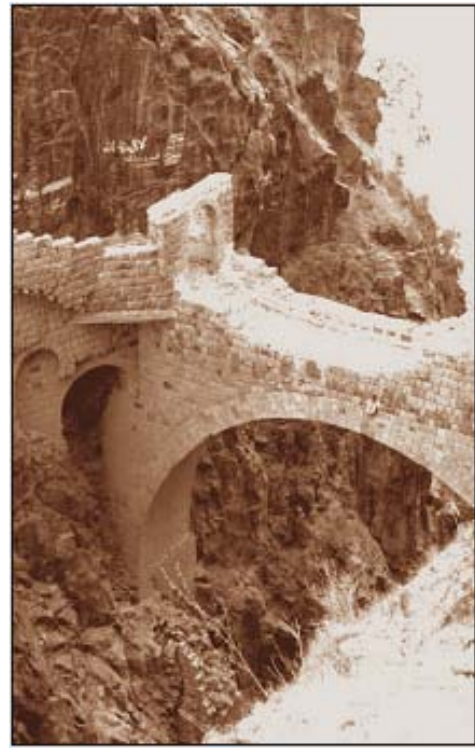


写真 16 橋脚の取り付け部②

(写真 15 の反対側)

(5) おわりに

イエメン政府はこの橋を誇りとしているように思われる。10 リアルのコインに写真 17 にあるように、現地に忠実なかたちでこれが刻まれているからである。



写真 17 10 リアルのコインに刻まれている Shaharah のアーチ橋

本文は筆者がかつてイエメン滞在中に集めた資料を基にしているが、一部インターネットからの入手資料も引用していることをお断りしておく。